298 局所心筋タリウム－クレアランスに関する臨床的検討

尾崎正治，古谷雄司，清水達朗，松村和彦，
楠川禮造（山口大　二内）

虚血部心筋の3時間後のThallium－201のClearance (Washout rate：WR)は健常部に比し低下することが知られているが，その値は運動負荷量によって異なり，各個体間での比較にはその標準化が必要である。我々は正常者13名，狭心症20名，狭心症のない陳旧性心筋梗塞16名における健常部（N:n=49）と一枝病変における狭窄冠動脈灌流域（Is：n=20）についてPressure Rate Product（PRP）とWRの関係をみた。PRPとWRはNにおいて r=0.4018，P<0.01と粗な関係であったが，その各PRPでのNのWRの下限はIsのそれとWR $=194\times10^{-5}$ PRP－6.7のidentical lineで明確に分離され（overlapは69例中1例のみ），負荷量の相違によるWRの異常の有無の判定が可能となった。

	r	P<
PRP（Ex）	0.4018	0.01
HR（Ex）	0.3568	0.05
%of max HR	0.3447	0.05
△PRP(Ex−Rest)	0.3013	0.05
△HR（Ex−Rest）	0.1795	NS

n=49 (normal region)

運動量を表わす各指標とWRとの関係は左表の如くであった。

299 運動負荷心筋シンチグラフィーにおける局所心筋の Radioactivity の経時的変化

鈴木重文，大和田憲司，矢尾板裕幸，柳沢佐代子，
山田善美，小松正文，高畑秀夫，竹沢将俊，
宮崎吉弘，小野和男，内田立身，刈米重夫
（福島医大　一内）

運動負荷 ^{201}Tl心筋シンチグラフィーにて，経時的に局所心筋内のRadioactivityの変化を検討した。

方法はエルゴメーター多段階漸増負荷により，^{201}Tl静注後，5，15，30，60，120分に左前斜位45度の心筋イメージを撮像した。左室壁に設定した心室中隔，下壁，側後壁領域の各放射能を求め，^{201}Tl静注第一回循環時のTime activity curveの最大カウント値の百分率を局所心筋摂取率Uptake Ratio(UR)とした。運動負荷における局所心筋のRadioactivityの経時的変化をURを用いて正常領域，虚血領域および梗塞領域について比較検討した。正常領域では，5分値0.24±0.04%，15分値0.24±0.06%，30分値0.24±0.05%，60分値0.22±0.04%，120分値0.18±0.03%であった。URは経時的に漸減したが，30分値にて再上昇を示す例もみられた。虚血領域のURは正常と梗塞領域の中間にあった。虚血領域のURの経時的な放射能の変化は正常領域に比して小さく局所心筋の経時的なRadioactivityの変化は心筋内の ^{201}Tlの動態を示唆するものと考えられた。

300 運動負荷Tl心筋シンチグラムにおける Washout Rate の意義

佐藤　聡，殿岡一郎，金谷　透，星　光，目黒光彦，
山口佳子，立木　楷，安井昭二，（山形大　一内）
高橋和栄，駒谷昭夫，（同　放部）

運動負荷Tl心筋シンチグラムにおけるWashout Rate (WR)が単独で冠動脈病変をどの程度検出し，また重症度を反映し得るかを検討した。

対象は，左前下行枝(LAD)のみに50%以上の狭窄を持つ患者30名(CAD群）と正常冠動脈を有する14名(N群）である。運動負荷時と3時間後に，4方向のPlanar像を撮像し左室領域を内腔の中心の周りに45°毎に8分割した。各分割についてWRを算出した。N群からmeanとSDを各々算出しmean－2SD以下を異常値とした。CAD群は，狭窄度が50%から75%未満（A群），75%以上（B群）の2群に分けた。

WRによる冠動脈病変の検出のsensitivityはA群93%，B群77%，両者合せて86%(specificity 78%)であった。また，LAD灌流領域の平均WRをN群，CADのA群，B群の3群で比較すると，各々0.53±0.05，0.47±0.07 0.36±0.04となり，WRが冠動脈狭窄度に比例して有意に低下した。

WRは冠動脈病変をよく検出し，その狭窄度をよく反映すると考えられた。

301 負荷心筋ECTに於いて特異な ^{201}Tl の動態を呈する病態とその鑑別

古閑幸則，古嶋昭博，下村　修，冨口静二，
吉岡仙弥，広田嘉久，高橋睦正（熊大放）
久木山清貴，泰江弘文（熊大循内）
土亀直俊（熊本労災病院放）渡辺　元（同内科）
早崎和也，中島昌道（熊本済生会病院循内）

最近、負荷心筋ECTに於いて、負のwashout rateを呈する症例が散見されるようになってきた。負を呈する病態として、冠動脈れん縮発作時の異型狭心症と、我々が報告した側副血行路を有する労作性狭心症の2つの病態が存在する。これら2つの病態を、心筋に於ける ^{201}Tl の経時的動態を追うことにより鑑別を試みた。対象は、冠動脈造影と負荷心筋ECTを共に施行した狭心症のうち、心筋ECTが経時的に3回以上スキャンしてある13例である。内訳は、異型狭心症5例、側副血行路を有する労作性狭心症8例である。異型狭心症の ^{201}Tl の経時的変化をみると、虚血部では、初期集積以後も緩徐なRIの集積が起こり、負荷直後より再分布時のカウントが高くなる一方、その他の領域では正常のWashout rateを示した。しかし、側副血行路を有する労作性狭心症では、異型狭心症と同じ動態を示す症例の他に、虚血部のみならず、心筋全域で ^{201}Tl の動態異常を示す症例も認められた。

Presented by Medical*Online